

非行から立ち直るために必要な力とは何か

名古屋大学 教育発達科学研究科 教授

河野 莊子

(お問い合わせ先) E-MAIL: s_kono@cc.nagoya-u.ac.jp



研究の背景

「人はいかにして非行や犯罪をやめるのか」、これは、近年、特に海外で精力的に研究されるようになったテーマです。日本においては、これに類する研究はほとんど行われていません。私は、非行少年たちと個人心理面接を行う中で、自分にとって都合の悪い事柄については、できるだけ考えないですませようとする姿を多く見してきました。その理由を、ある少年は、「どんどん落ち込んでいって、這い上がれなくなるような気がして怖いから」と教えてくれました。私は、少年たちが立ち直るためには、「自分の心の中で今何が起きているのかを直視し、自分にとって受け入れがたい情緒を適応的に処理する力」が必要だと考えています。そして、これを「抑うつに耐える力(2003)」と名づけました。本研究は、「抑うつに耐える力」を強化するために何が必要なのかを追究したものです。

研究の成果

「抑うつに耐える力」は、「孤独に耐える力」「不安に向き合う力」「強がらずに自己開示する態度」の総合体です。さまざまな種類のストレスへの対処方略を持っていることが、これらを強化し、反社会的問題行動を減らすのではないかと仮説を立てました。検討の結果、非行少年は、困難を解決するための具体的な努力をすることで、不安に向き合う力が高まり、反社会的な問題行動をしなくてすむようになることがわかりました。また、

抑うつに耐える力の3つの要素について、非行からの立ち直り群・非行継続群・非行なし群の3群間で比較しました(図1)。その結果、非行行動をやめるためには、孤独を感じても行動化することなく、心の中に保持し続けることができるような力が必要であることがわかりました。

一方、想定外だったのは、非行からの立ち直り群が、もっとも多く「他者に自分のことを話さない」と回答したことです(図2)。自分の弱さを他者に見せないことが、立ち直るための重要な原動力となる可能性が示唆されました。この結果がどのくらい汎化できるものなのか、今後、検討する必要があります。

今後の展望

「抑うつに耐える力」は、臨床経験からは妥当性があると考えていますが、さまざまな概念が混入しているため、もう少し整理しなければなりません。また、本研究によって、不安や孤独感との付き合い方が、非行・再非行と密接な関係があることがわかりました。孤独を感じた時の対処方法を学ぶようなプログラムを開発する必要があると考えています。

関連する科研費

2012-2017年度 基盤研究(C)「非行からの離脱プロセスに関する研究-反応の柔軟性が抑うつに耐える力に及ぼす影響-」

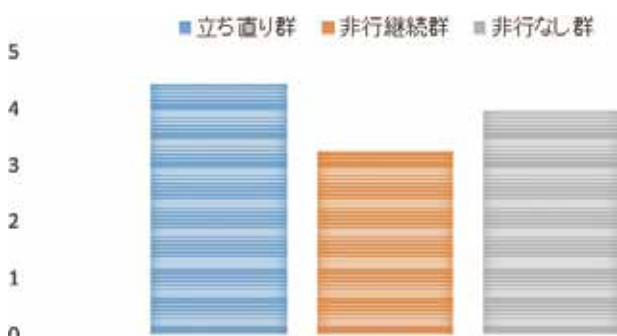


図1 孤独に耐える力の3群間での比較

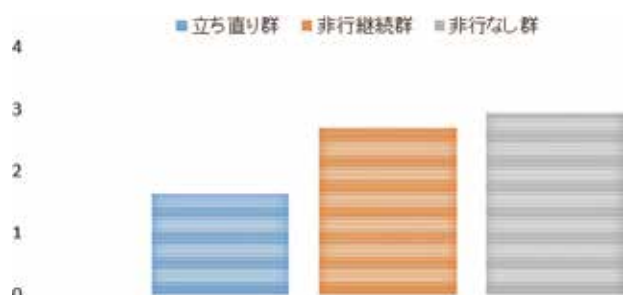


図2 強がらずに自己開示する態度の3群間での比較